みると、私にとってカナダはなかなか因縁深い国ではあった。

さ細な事ではあったが、少年の頃最初に出会った外人教師は、カナダ人でトロント大学を出た人だった。莫好きで、いつもパイプをくわえ、唇の片隅にひきつれのできた人だった。トロントの名もその時初めて知った。

しかしなんといっても私の生涯の中で大きな衝撃を与えた事件がカナダで起きた。それは父の死であった。

一九二五年、突然私は父客死の報に接した。当時父は大阪汽船の最大級の商船の機関長をしていたが、二月某日脳溢血で急逝した。バンクーバーに入港中のことであった。行年五十一才。今日からみれば夭折だった。遺骸は、純白のビロードのはられた洋風の棺に、タキシード姿で、顔には薄化粧さえして安らかに眠っているような姿で送りとどけられた。

一九二八年の夏、私は大学の休暇を利用して、生前父の御世話になった方々にお礼を申し上げるため、また父終焉の地を親しく自分でみるため、バンクーバーの地を訪れた。これが前後三回にわたるカナダ訪問の最初である。それは日加修交条約の締結前年のことで、五十年ほど前のことである。しかし私には、その時の印象がまだ昨日のことのように深く脳裡に刻印されている。

爾来五十年、大変な激動の半世紀だった。

私の父祖の地広島に原爆が投下され、先祖代々の墓石は焦土の中に散り失せ、親類縁者はあらかた死に絶えた。緒戦から敗戦まで兵士として召集された私は、敗戦の秋、栄養失調のため最愛の母を失なった。一時私は生きる意欲をなくしてしまった。

原爆の焦土の跡には、草も木も生えまいといわれた。それが今日みごとに蘇ったのと同じように、私は四人の子供の生長に励まされ生き続けた。

上の二人は建築家になり、コンサルタントとして海外で活躍し、一人娘はインテリア・デザイナーとして独立し、末子は二、三年前からメキシコにあって日墨貿易に従事して、漸く目鼻がつこうとしている。

数年前、子供達は、私達二人の老後のために、伊豆の東海岸の太平洋を見晴らす高台に、小ぢんまりした洋風の隠居所を贈ってくれた。私はここを終焉の地と定め、読書三昧の晩年を送ろうと考えた。

ちょうどその時、東京にいる娘に女の子が生れた。私達にとっては初孫だった。日夜仕事に追われる娘は、生れ落ちるとすぐその孫を私達の手に託した。多忙な娘は、寸暇を見付け、自動車に山のように土産をつむと、月に一度は子供の顔を見にかえって来たが、すぐとんぼ返りに東京の仕事へ帰っていった。孫はそうしたものと思いこんでいるのか、母親の後も追わず、私達祖父母との生活になじんだ。私達は私達で、日々生長してゆく孫娘の可愛さに耽溺し、時の過ぎるのを忘れた。そして気付いた時には、孫は幼稚園のコースを終わろうとしていた。

老妻の方は至極元気だったが、反対に私の方は数年前に心不全で入院したのを手始めに、皮膚癌、前立腺肥大、背髄炎などのため、入院手術の日が続いた。

しかし一九七七年の晩秋、小康状態を利用して、私達は孫を連れ、メキシコにとんだ。毎年年末から温泉場へ赴く代わりに、メキシコの息子に混血の孫ができたのに対面するためだった。娘も同行した。

羽田を夕刻出発した私達は、翌朝十数時間後にバンクーバーの空港に着いた。五十年前、単調な二週間の航海の後やっと到着した往時を思い出して、感慨無量だった。

これが私の思いがけない二度目のカナダ訪問だった。空港では、娘の友人のカナダの青年の出迎えをうけ、ただちにベイショウ・インに旅装をとき、一週間の滞在を楽しんだ。私は、五十年前の、鮮烈な針葉樹林のバンクーバーの思い出を忘れることができなかったが、すっかり近代化されたバンクーバーの面影には、往時を偲ぶよすがもなかった。孫にも、母親との楽しい旅だった。

一週間の楽しい旅行者としての滞在を終わると、私達はカナダの青年も同行してメキシコへ入った。

クリスマスから正月へかけ、祭礼に湧いているメキシコの二か月の滞在中、私は遺跡巡りもさることながら、シケイロスを中心に燃え上ったメキシコ芸術の革命、壁画運動の研究に没頭した。毎日美術館巡りだったが、その疲れがでたのか、サンフランシスコ見物を終えて帰国すると、またすぐ入院だった。

これより先、バンクーバー滞在中、私はカナダの青年から娘との結婚の許可を求められた。彼も私達に同行して、メキシコを訪問したのだったが、一足先にモントリオールに帰り、両親の許可を得て、娘が来るのを待つと言うことで、娘はサンフランシスコで私達と別れると、モントリオールの彼のもとへ赴いた。

私は入院中の病床で考えた。

私達はもう孫を養育するには年をとり過ぎた。それに娘がカナダで新しく家庭をもつ以上、一刻も早く孫を母親の手に渡し、彼等の新しい生活の中に加えることが必要であろう。それには学令に達したこの機会を他にしては他にない。

しかし、今、孫と別れることは、私には堪え難い寂しさであると同時に、言葉の通じない異国で孫がどんなに心もとないことだろうと思うと、不憫でならなかった。

私は息子達に相談した。息子達は私の気持を察したのであろう。いっそ孫と一緒に私達もカナダに行き、暫く一緒に暮してみてはと、思いがけない提案だった。そしてそれには娘夫婦も大賛成だった。折よく手ごろな売家が見つかり、息子達は私達のためにこれを買ってくれた。早速娘夫婦は内部の改装にかかり、改造途中であったが、孫を九月の新学期から入学させるため、八月末に娘は私達を迎えに帰国した。

まことにあわただしい、思いがけぬ三度目のカナダ訪問だった。